

# 令和7年 秋季俳句講座

「私と季語（6）」

## 第2回 宮坂 静生

「地域の季節の言葉と季語」

沖縄の二月風廻り（にんがつかじまーい）や琵琶湖辺の比良  
八荒（ひらはっこう）など地域の季節の言葉で俳句を作つて  
みませんか。わくわく感がします。季語とはなにかを考え  
てみます。

主催 公益社団法人俳人協会

## 宮坂静生 略歴

1937(昭和12)年 11月4日、長野県松本市生まれ。本籍千曲市。本名敏夫。

1951(昭和26)年 14歳 松本市立清水中学校2年、俳句初学。

1955(昭和30)年 18歳 俳誌「龍膽」(藤岡筑邨)、俳誌「若葉」(富安風生)に投句。

1964(昭和39)年 27歳 第1句集『青胡桃』(龍膽俳句会)刊。

1968(昭和43)年 31歳 6月、俳誌「鷹」主宰藤田湘子に師事する。

1976(昭和51)年 39歳 評論集『夢の像』(高文堂出版社)刊。

1978(昭和53)年 41歳 2月、俳誌「岳」創刊。

1980(昭和55)年 43歳 「鷹」同人会長に就き、爾来10年間。

1984(昭和59)年 47歳 論文集『正岡子規と上原三川』(明治書院)刊。

1986(昭和61)年 49歳 信州大学医療技術短期大学部教授。

1995(平成7)年 58歳 湘子の要請により「鷹」を退会、28年間在籍。

第45回現代俳句協会賞受賞。評論集『虚子の小諸』(花神社)刊。

1996(平成8)年 59歳 論考『子規秀句考―鑑賞と評論』(明治書院)刊。

2000(平成12)年 63歳 第7句集『山の牧』(本阿弥書店)刊。評論集『俳句からだ感覚』(本阿弥書店)により第1回山本健吉文学賞(評論)受賞。

2001(平成13)年 64歳 論文集『正岡子規―死生観を見据えて』(明治書院)刊。  
随筆集『雪そして虚空』(花神社)刊。

2002(平成14)年 65歳 信州大学医学部保健学科学科長。

2003(平成15)年 66歳 停年退官、信州大学名誉教授。評論集『俳句地貌論』  
(本阿弥書店)刊。NHKテレビ「糸瓜の花―正岡子規の死生観」(この頃の時代)。

2004(平成16)年 67歳 第47回松本市芸術文化功労者。

2006(平成18)年 69歳 評論集『語りかける季語ゆるやかな日本』(岩波書店)により  
翌年、第58回読売文学賞(紀行・随筆部門)受賞。

2007(平成19)年 70歳 NHK教育テレビ「NHK俳句」に出演。以後2年間。

2008(平成20)年 71歳 評論集『ゆたかなる季語こまやかな日本』(岩波書店)刊。  
9句集集成『全景宮坂静生』(花神社)刊。NHKテレビ  
「露の世の光と闇―小林一茶の死生観」(この頃の時代)。

2009(平成21)年 72歳 現代俳句協会副会長に就く。5月より「おはよう名句」  
(「日本農業新聞」)隔日連載、現在まで。岩波新書『季語の誕生』刊。

2011(平成23)年 74歳 第10句集「雛土蔵」(角川書店)刊。

2012(平成24)年 75歳 評論集『昭和を詠う』(NHK出版)。

2014(平成26)年 77歳 第6代現代俳句協会会長に就く。第11回俳句四季大賞受賞。  
地貌季語発掘など季語体系の見直を提唱し第21回信毎賞受賞。

2015(平成27)年 78歳 『東日本大震災を詠む』(俳句四協会編・朝日新聞出版)。  
第11句集『草泊・2013俳日記』(本阿弥書店)刊。

2016(平成28)年 79歳 第12句集『噴井』(花神社)刊。

2017(平成29)年 80歳 評論集『季語体系の背景―地貌季語探訪』(岩波書店)刊。  
現代俳句協会創立70周年記念大会開催(帝国ホテル)。

2018(平成30)年 81歳 現代俳句協会特別顧問に就く。第15回「みなづき賞」受賞。  
5月、「岳」40周年記念大会開催(軽井沢プリンスホテル)。  
評論集『沈黙から立ち上がったことば―句集歷程』(毎日新聞出版)刊。

2019(平成31・令和元)年 82歳 第19回現代俳句大賞受賞。信州大学同窓会連合  
会賞受賞。『俳句必携―1000句を楽しむ』(平凡社)刊。  
6月、ドイツ、ハイデルベルク大学講演「芭蕉の死生観」。

2020(令和2)年 83歳 NHK第2ラジオ文化講演「月山と芭蕉」。

2021(令和3)年 84歳 第13句集『草魂』(角川書店)により第34回詩歌文学館賞  
受賞。

「岳」500号記念号発行。

2023(令和5)年 86歳 5月、「岳」45周年記念大会、記念号発行。  
静生句碑建立(千曲市龍洞院)。『俳句鑑賞1200句を楽しむ』(平凡社)刊。

2024(令和6)年 87歳 『俳句表現 作者と風土・地貌を楽しむ』(平凡社)刊。  
第14句集『鑑真』(本阿弥書店)刊。

2025(令和7)年 88歳 10月、宮坂静生と仲間たち・米寿祝賀会(市ヶ谷私学会館)。



2017. 9. 21 現代劇 (撮影 黒田孝雄)

(平成'24)  
2012. 3. 24 第6代現代俳句協会会長に就く



# 地域の季節の言葉と季語

宮坂静生

## 1 風景↓風土

○風土俳句への共感と同時に違和感

「合掌部落」能村登四郎（「俳句」，55年）

暁紅に露の藁屋根合掌す

○本格俳句とはなにか（金子兜太，81年）

風土を自然的・社会的存在として造型する（どこか観念的か）

2 作句活動の転機としての，60年安保体験——生者と死が共存。  
社会的存在として死者を意識。

○信濃追分の風景↓大日向開拓地の風土へー  
身近な死者あつてこそいま生きている



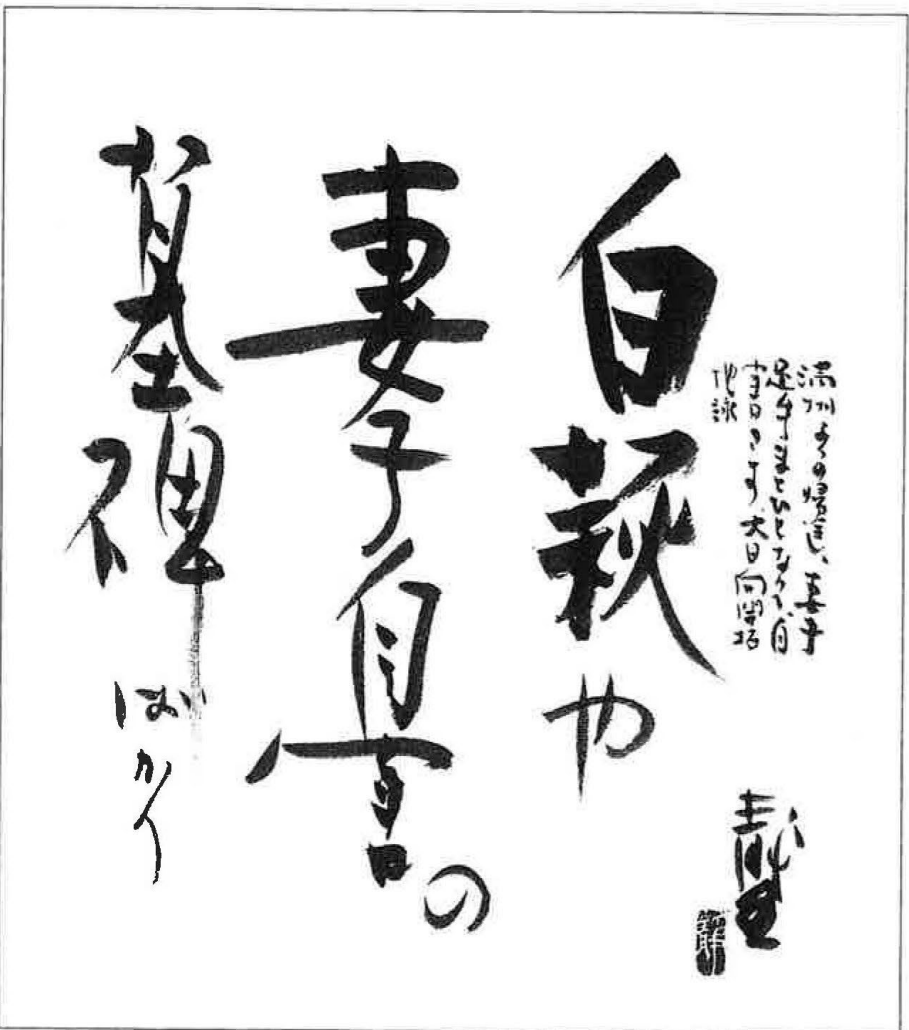
農作業に励む人々と開拓村の子等  
（昭和28年秋・軽井沢大日向）



入植間もない頃・粟の脱穀風景  
（軽井沢大日向）

〈白萩や妻子自害の墓碑ばかり〉 静生

〈勇氣こそ地の塩なれや梅真白〉 草田男



出陣近き教子に語って  
次の一句を示す

勇氣こそ地の

塩なれや梅真白

草田男

○「地貌論―季語のいのち」(87)―大正期の碧梧桐の実感重視  
と地域の発見という種が蒔かれ、虚子門の蛇笏・普羅・鬼  
城・石鼎らが受け継ぐ。特に普羅の「地貌」への着眼。地貌は  
言葉により継承される。能登の「あえのこと」。以下このよう  
な言葉を「地貌季語」と名付けたい。

〈田祭や深き茶碗にあづき飯〉(普羅)

### 3 季語体系と地貌季語

既存の季語体系の大方は、およそ1000年頃に歌語として平安貴族が和歌を詠むための都人の美意識に基づく季節の題目から生まれた言葉。

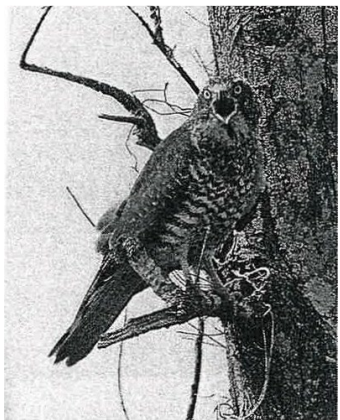
地貌季語は2群をなす。

○上記に入りえなかった地域の多様な季節現象や特有な生活に根付いた言葉を掬い上げたもの。例「木の根明く」「桜隠し」  
ぎょうじやにんく たかのしと おちたか かじまや  
「行者蒜」「鷹の尿雨」「落ち鷹」「風車祝」

逝く母を父が迎へて木の根明く 宮坂静生



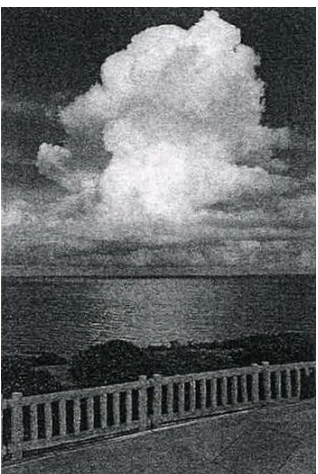
桜隠し (2013.4.11 松本)



落鷹(金子進撮影)

○既存の季語の本意を踏まえながら地貌的特徴をユニークに表現しているもの。例「雪解」↓「雪ねぶり」「道乾く」、「雲の峰」  
↓「立ち雲」

立ち雲は大和・武蔵の卒塔婆よ 渡嘉敷皓駄  
立ち雲は祝女の胸乳の如く迫り 小林貴子



摩文仁の丘の立ち雲

## 既存の季語体系と地貌季語の関係

地貌季語の基本は既存の季語体系を補完するために発掘されるものではない。例えば「木の根明く」は歌語以来の〈雪解〉の美意識に触発され、地域の生活からの気付きにより見出された固有の生活語である。両者は季節の言葉の美意識の上で、生活圏における中央と地域という差別の関係ではない。むしろ既存の季語体系と地貌季語とは背後に互いに刺激し合う、水稻耕作に基づく弥生時代の生活圏を狩猟漁撈採集の縄文時代の生活圏が時に溶け合い、あるいは反発し合いながら大らかに包括するような関係ではないか。「木の根明く」はマタギが春の「出熊猟」の時期を察知するために用いられた言葉のルーツが背景にある由。



木の根明く 「安曇野 アルプス山麓の四季」



安曇野 アルプス山麓の四季 穂苅貞雄

穂苅貞雄

穂苅貞雄 直筆サイン

宮古島の鷹の渡りへの注目―

鷹の渡りこそ1万年前の縄文以来の自然そのものであろう。列島に住んできた民族の「集団深層意識」を支えている原風景ではないか。

言葉は後の時代のものであるが、地貌季語の着眼の基になる自然は稲作牧畜文化の世界の背後にあるいは深部に横たわる狩猟漁撈採集文化に関わることに気付く。広くアニミズムとしての時代を拓く視点を暗示するのではないか。

4 虚子の花鳥諷詠における人間主体のあり方と兜太のアニミズム的存在者の視点

○虚子の場合

虚子の評価は自我中心ではなく人間を含む大きな自然（花鳥）を詠む詩として確立した。（岩岡中正『虚子と現代』2010・角川書店）

〈朝顔にえーッ屑屋でございかな〉

問題点は詠む主体はどうなるか。

○兜太の場合

養老孟司の指摘した「身体の脳化」（『身体の文学史』1997・新潮選書）

人間は心であって、身体ではないという心を重視する人間把握。

◇人体の自然 兜太の東北の風土からの縄文的な原始感覚を感知し、心理（観念）重視からからだ感覚の反逆へ。

〈人体冷えて東北白い花盛り〉

◇兜太流アニミズムにして存在するもの

〈おおかみに螢が一つ付いていた〉

〈梅咲いて庭中に青鯨が来ている〉

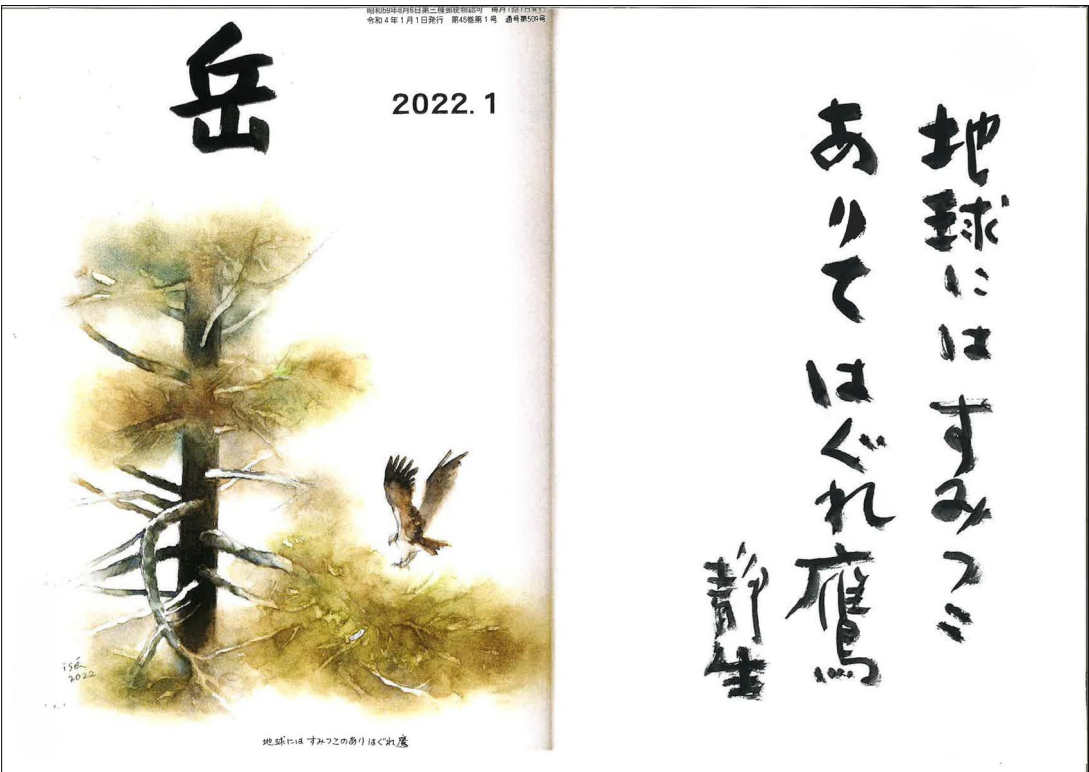
## 5 縄文的地貌の発見

花鳥諷詠という「歌枕」風景の淵源にさかのぼり、「縄文的」原風景を発掘し詠む。それが「地貌」の発見、自然を相対的に構造として深く捉えることに繋がる。現代の風景の中に、子ども頃の聖域・呪術的空間であった「原っぱ・隅っこ・洞窟」原体験へ響くものがあるのではないか。

それは明治時代の子規が東京中心の風景（「国家・国民」の風景）ではなく「盛岡の人は盛岡の実景を詠むが第一なり」（「随問随答」・明治32年6月号「ホトトギス」と盛岡の風景（「地域・地貌」）とが全く平等だという日本を地域のコミュニティーから積み上げ、形成する新しい時代の考えに重なる。地貌の視点から、もう一度「自然」を見つめ直そうという提案である。

奥野健男『文学における原風景』（1972年・集英社）。

〈地球にはすみっこありてはぐれ鷹〉 静生



# 令和7年 秋季俳句講座

「私と季語(6)」

◆ 第1回講師 — 小林恭二

動画配信日 10月7日(火)

◆ 第2回講師 — 宮坂静生

動画配信日 10月14日(火)

◆ 第3回講師 — 西山 睦

動画配信日 10月21日(火)

◆ 第4回講師 — 今井 聖

動画配信日 10月28日(火)